

ドライクリーニングでは、汚れの除去と併せて再汚染の防止が重要な要素になります。今回は、再汚染の事例を紹介しながら、再汚染防止に必要な条件を考えます。

監修／クリーニング総合研究所



### 衣類の状態

石油系ドライクリーニングを行ったところ、前身頃見返し部分や衿、台衿などの接着芯地が使用されていると思われる部分に、ドット状のシミが生じている。

### 原因

溶剤中に溶解している油性物質などが接着芯地の樹脂に吸着、再汚染したもの。

顕微鏡で観察すると、シミ部分の繊維が樹脂で粘着している

ことや、エタノールや油性シミ抜きスプレー等でシミが除去できることから、油性物質等による汚染が生じていると推定できる。

### 事故の防止対策

メーカー指定量のドライ洗剤をチャージした清浄な溶剤を使い、負荷量、洗浄時間、循環液量などを適正に管理すること。

### 溶剤管理

特に石油系ドライでは、フイ

### 洗浄時間

一浴でのフィルター循環による洗いを基本とする石油系ドライでは、汚れがフィルターで完全に除去された時点で完了するのが理想であり、洗浄時間はフィルターが汚れを除去するのに必要な時間を考慮して設定する。

### 循環液量

汚れがフィルターで完全に除去されるまでの時間は、循環液量とフィルター性能で決まる。フィルターで汚れを十分に除去するには、1ワッシャーを洗う間に少なくともワッシャー内の溶剤量の7倍程度の液量を循環させることが必要とされている。

### 負荷量

負荷量は、メーカーが指定するワッシャー標準負荷量の80%程度に調整することが望ましい。負荷量が多くなれば、溶剤中に出てくる洗たく物からの汚れの量も多くなるため、フィルターでの汚れの除去に時間を要する。

またフィルター圧力の最高許容値は一般に0.2MPa(2kg/cm<sup>2</sup>)とされている。

#### 参考 カarbon状粒子による再汚染の確認方法

再汚染で多いのは、カーボン状粒子によるもの。カーボン状粒子による再汚染は、再汚染除去剤を使い、もみ洗いすることで通常は除去できる。再汚染除去剤は、再汚染の確認が主な目的で調合しているため、洗たく物全体の再汚染を除去する作業には適さない。

※再汚染除去剤  
高級アルコール系洗剤 60g、カルボキシメチルセルロース(CMC) 23g、トリポリリン酸ナトリウム 17gを適当量の水で混ぜ合わせ、ヨーグルト状にした調合剤

- 品名…ジャンパー
- 素材…ポリエステル
- 取扱い絵表示…
- 処理方法…石油系溶剤によるドライクリーニング10分、加熱静止乾燥



見返しや衿などにドット状のシミが生じたジャンパー



ドット状のシミは、溶剤中の油性物質等が接着樹脂の芯地に吸着し、再汚染したもの